

第一章 全体主義を解剖する

▼哲学で全体主義を解剖する

マルクス・ガブリエル（以下、MG）今、哲学者が真つ先にすべきことは、現在起きている現象について、よりよく理解できるようにすることです。たとえば、ポピュリズムという言葉が飛び交っています。しかし、今の時代状況を説明するのに、ポピュリズムという切り口は、あまりうまくいきやらないと思います。というのも、ポピュリズムが明確に何を指すのか、誰も説明できていないからです。

ポピュリズムとは何なのか。多くの人が嫌う「何か」であることはわかります。それでも、その背後にちゃんとした理論があるわけではありません。ポピュリズムという「何か」についておしゃべりをしていて、ポピュリズムにまつわるステレオタイプ的な見方が噴出しているだけです。右傾化、排外主義、外国人嫌悪、あるいは分断を生み出すアイデンティティ・ポリティックスといったものですね。社会のなかの事象を単に知るためだけなら、そうしたステレオタイプ的な見方が役に立つこともあります。

しかしわたしたちが本当に必要なとしているのは、この状況を哲学的に、あるいは社会的にきちんと分析し、診断し、修復することです。しかもその分析は、的を射た本当に優

れたものでなくてはなりません。ところが、わたしたちはまだそこにいたっていません。だからこそ、これまでとはまったく違う、あらたな考え方を探究しなくてはならないのです。

ポピュリズムという概念をもち出すのは、現代社会を診断する賢い手法ではありません。それでは、現在の社会状況をうまく説明できないのです。では、現在起きている問題の核心にあるものとは、何なのか。

わたしがまず提示してみたいのは、公的な領域と私的な領域の区別の破壊です。そして、その背景にあるあらたな形の全体主義に現代社会が脅かされているのではないか、と考えているのです。

中島隆博（以下、中島）なるほど、それは重要な問いの始め方ですね。わたしもガブリエルさんの哲学的思考の背景には、おそらく全体主義への問いがあると思っています。そのため、この対話をしてみたいと思ったのです。

MG ありがとうございます。わたしも中島さんと話すのを楽しみにしていました。とりわけ全体主義がテーマであるならば、本当に真剣に議論したいと思っています。

まずはドイツの状況からお話しさせてください。さきほどラジオを聞いていましたら、

ひとつの州でネオナチが関与した殺人を含む暴力事件が続いていて、二〇一九年だけで五件あったとのことでした。それはフランクフルトのあるヘッセン州での出来事で、政治家もネオナチに銃撃されました。ヘッセン州にはかなりのネオナチがいるようで、これがフランクフルトという大都市を抱えるこの州の現状です。「国家社会主義地下組織（NSU）」と呼ばれる運動がドイツ全域にあり、かなり大きなものとなっています。

中島 それは容易に国家社会主義ドイツ労働者党、ナチ党を連想させますね。

MG ええ、彼らはドイツの正真正銘のネオナチのグループです。ただ彼らが、勢いを増している政党「ドイツのための選択肢（AfD）」とどのような関係にあるのかは、あまりはつきりわかつてはいません。AfDを正確に理解するのは非常に困難です。AfDはただの保守なのか、極右なのか。極右だとしても、どの程度のものなのか。そうしたこともはつきりしていませんし、党内にもさまざまなグループがあるようです。

その一方で、NSUに関わる人々は、おそらくドイツ全体の人口の数%はいるはずですが、つまり、一定数のドイツ国民が、戦前の国家社会主義を作り上げたような考え方を維持しているのです。

そうした過激な暴力集団は、ナチの下部組織である突撃隊を連想させますが、それ以上

のものです。突撃隊はナチが政権掌握する前の一九二〇年代に共産主義者を街頭で殴たたような残忍な人々です。現代のネオナチとはそのような人々です。

ただし、市中でのそうした暴力が、全体主義国家をもたらすわけではありません。そういうものが今、存在しているのはまずいことですが、制度的には脅威ではありません。制度的に本当に脅威なのは、従来とはまったく異なるやり方で登場してくる全体主義です。全体主義がどのようにして生まれるのかを確認するためには、ドイツ、日本、中国、ロシアなどの具体的な状況を見ていかなければなりません。

▼全体主義は公私の境界線を破壊する

MG こうしたことを踏まえて、現在、ポピュリズムと呼ばれている現象について考えてみましょう。わたしの考えでは、現在起きていることは、全体主義という文脈でとらえた方が適切だと思います。なぜなら、わたしたちが今、経験しているのは、公的な領域と私的な領域の区別が破壊されることだからです。

このことは近代と大いに関係がありますので、もう少し詳しく説明します。近代とは、グローバルに生じたプロセスですが、世界にはさまざまな複数の近代があります。日本の

近代はほかとは違ったタイプのものですし、ドイツと比べても異なる形で近代に入りま
した。

しかし、それぞれに異なる複数の近代にも共通していることがあります。それは、私的
な領域と公的な領域の間に明確な境界線を引いたということです。

そうした境界線を破壊するのが、全体主義です。全体主義では、あらゆる私的なものが、
公的なものになりかかっていきます。あなたの頭のなかの考えでさえもです。

完全な全体主義の体制がどういうものだったのかを、思い出してみましよう。たとえば、
中国の文化大革命や戦前日本の全体主義、ナチ・ドイツの独裁体制などです。これらの全
体主義の運動を特徴づけていたものは、人々が家族や隣人を攻撃するようになったこと
です。子どもは親を告発しましたし、誰もが教師や隣人を告発するようになったのです。そ
れはどうしてなのでしょう。まさしく国家が、人々に私的な生活の空間を与えないよう
にしたからなのです。

中島 国家によって人々はそうした行動をとるように誘導されていくのですね。

MG そうです。

▼デジタル全体主義とテクノロジーの「超帝国」

MG ところが、現代社会で起きているのはあらたな形の破壊です。公的な領域と私的な領域の境界線の破壊の仕方が新しくなっているのです。それは、全体主義的な「国家」が存在しないまま、その境界線が破壊されているということです。かつての全体主義と、現在のあらたな全体主義とは、そこが大きく違うのです。

中島 全体主義国家は今も存在しないということですね。「国家」としての中国やロシアを全体主義的だとみなさないということですか。

MG ええ。今、進行している全体主義の核心は、デジタル化です。わたしたちのテクノロジーが「超帝国」なんです。つまり技術そのものとそれを操るソフトウェア企業群が、全体主義的な超帝国を形作っているのです。

各国政府はそれに対抗しようとしています。中国、ロシアだけでなく、米国、英国、ドイツ、フランスなどはいずれも、デジタル化が私的領域を破壊することを食い止めようとしています。これこそが、わたしたちが理解しなければならぬ、一番大きな潮流です。

現代では人々は自宅にいながら、公的な領域にいます。人々は自分のやっていることを写真に撮り、その写真をオンラインで公開します。Twitter、Facebook、Instagram、